

ロシア：再生可能エネルギーの導入に向けた動きが少しずつ進展¹

新エネルギー・国際協力支援ユニット 新エネルギーグループ

ロシアでは冬季オリンピックが成功裏に閉幕したばかりだが、ロシアの「南国」と言われる開催地のソチで、五輪関連施設に太陽光発電などが取り入れられたという話は聞こえてこなかった。一方、6月にサッカーW杯大会が開催されるブラジルでは、複数のスタジアムに大がかりなソーラーパネルが設置されるという。単純な比較はできないが、再生可能エネルギーの導入において、ロシアは出遅れているという印象が強い。

それでも、再エネ導入に向けた動きは少しずつ進展している。カスピ海に面したロシア連邦ダゲスタン共和国では、今年1月半ばに新しい太陽光発電所が完成した。発電容量は1MWと決して大きくはないが、ロシアでは最大規模となる。Enerpac社をはじめとする3つのドイツ企業がプロジェクトに参画した²。

昨年10月には、再生可能エネルギーに対する補助金プログラムが正式にスタートし、政府による初の入札が行われた。入札の結果、39件（計505MW相当）のクリーンエネルギー事業が落札。そのうち32件（計399MW）を太陽光発電が占めた。風力では7件のプロジェクトが選定された³。

続いて、政府は昨年12月、16件の風力発電プロジェクトを承認した。これらの風力発電所は国内全域にまたがって建設される⁴。中でも、ロシア南部連邦管区に建設予定のVolgograd Lower Volga風力ファームは設備容量が999MWと、これまでにない大規模なプロジェクトである。

世界最大の石油生産国であるロシアでは、発電量に占める再エネの比率はわずか0.8%に

¹ 本稿は経済産業省委託事業「国際エネルギー使用合理化等対策事業（海外省エネ等動向調査）」の一環として、日本エネルギー経済研究所がニュースを基にして独自の視点と考察を加えた解説記事です。

² EPCサービスを提供したEnerpac社のほかに、Mounting Systems社とSkytron社がプロジェクトに参画した。

³ 補助金を与えられるのは、最も低い設備投資を申請したプロジェクトである。また、50%のミニマム・ローカルコンテンツ要求が課される。

⁴ ロシア南部連邦管区（Southern Federal District）では、999MWのVolgograd Lower Volgaをはじめとする5箇所で大規模風力ファームの建設が計画されている。また、カルムイク共和国では、2箇所の風力ファーム（150MWと300MW）が計画されている。モスクワの北約200キロに位置するムルマンスクでは、Lodeyny（300MW）とKolsky（500MW）の2箇所に風力ファームが建設される。さらに、サンクトペテルブルク地域では300MW、西部のカリーニングラド地域では200MWの施設がそれぞれ計画されている。

すぎず、国内で稼働している風力・ソーラープラントの数も限られている。しかし、昨年あたりから、政府は再生可能エネルギーの導入によりやく本腰を入れ始めた。プーチン大統領は昨年 5 月、2020 年までに 6GW の再エネ発電容量を導入し、再エネ比率を 2.5%⁵とする目標を掲げ、クリーンエネルギーに対する補助金プログラムを正式に承認した。具体的には、2014 年から 2017 年までに水力発電と並んで 1,100MW の風力、710MW のソーラー発電施設を建設する計画である。

モスクワとウクライナに本拠を置く調査・コンサル機関 Innovative Business Centre (IBCentre) の主催で、昨年 11 月にモスクワで開催された第 2 回国際持続可能エネルギー・フォーラム (The 2nd International Sustainable Energy Forum: REF-2013) には、ロシア連邦だけでなく世界各国から約 60 名の政府、企業、国際金融機関、クリーンエネルギー団体の関係者が参加した。会議では、国の再エネ政策のあり方、電力供給契約の役割、ローカルコンテンツ要求の是非、プロジェクトを実施する上でのリスクなど、再エネを導入する際に考慮される具体的なトピックが話し合われた。

ロシアの再生可能エネルギーは大部分が未開発であるだけに、ポテンシャルは高い。特に風力は、潜在能力の 25% を利用するだけで 175,000MW に達すると見られている。豊富な化石燃料資源に依存してきたロシアが、今後再エネ部門をどのように発展させていくのか注目される。

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp

⁵ 当初案では目標値を 4.5% としたが、その後、より現実的な目標として 2.5% に下方修正された。